

# 第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会



85th JDA Tokyo, 2021

## ランチョンセミナー4

2021年11月13日(土) 11:30~12:30

第4会場 京王プラザホテル 5階 コンコードボールルームA

座長 | 山中 恵一 先生 三重大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授  
浅野 善英 先生 東京大学大学院医学系研究科 皮膚科学 准教授

## 様々な病態の乾癬患者の症状と QOLをどうマネジメントするか？

### 生物製剤の特性を生かした乾癬治療について

演者 | 新井 達 先生 聖路加国際病院 皮膚科 部長

### 皮膚科医が診るべき早期乾癬性関節炎

演者 | 山口 由衣 先生 横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 教授

ご都合によりご講演がキャンセルとなりました。



## 生物製剤の特性を生かした乾癬治療について

新井 達( あらい さとる ) 聖路加国際病院 皮膚科 部長

乾癬の治療は2010年以降、格段の進歩を遂げ、特に中等症から重症の乾癬に対する治療の選択肢は飛躍的に増加した。その結果、治療に難渋する重症例に対しても生物製剤をはじめとする様々な治療を用いて、早急に対処することが可能となった。

現在使用可能な乾癬の生物学的製剤は10製剤であり、抗TNF- 抗体製剤、抗IL-17( A、受容体 )抗体製剤、そして抗IL-23( p19、p40 )抗体製剤の大きく3群に分類することが可能である。各製剤ともに優れた効果を持つ薬剤であるが、これらの薬剤をどのように使い分けるか、ということが日常診療では重要な鍵となる。

また、生物学的製剤の選択にあたっては、対象となる患者さんの臨床型( 尋常性乾癬、乾癬性関節炎、そして膿疱性乾癬 )と、その患者さんの皮膚症状の部位( 爪、被髪頭部、下腿などの難治部位の有無 )も考慮して使用薬剤を決定する必要がある。

本講演では、上記のポイントを踏まえた乾癬の生物学的製剤治療について述べ、そのなかで発売後6年が経過したセクキヌマブの位置づけについて考えたいと思う。

### 略歴

1991年 3月	北里大学医学部 卒業	2004年 4月	北里大学医学部皮膚科 講師
6月	北里大学病院皮膚科 研修医	2010年 4月	聖路加国際病院皮膚科 副医長
12月	武蔵野赤十字病院皮膚科 出向	2012年 4月	北里大学医学部皮膚科 講師
1993年 6月	横浜労災病院皮膚科 出向	2013年 3月	北里大学医学部皮膚科 准教授
1994年 6月	北里大学病院皮膚科 病棟医	4月	聖路加国際病院皮膚科 医長
1996年 4月	横浜労災病院皮膚科 出向	2015年 5月	聖路加国際病院皮膚科 部長
1998年 4月	北里大学医学部皮膚科 助手		現在に至る

所属学会等 日本皮膚科学会( 専門医 )、日本小児皮膚科学会( 運営委員 )、日本皮膚免疫アレルギー学会( 代議員 )、日本乾癬学会、日本臨床皮膚科医会、日本リウマチ学会

## 皮膚科医が診るべき早期乾癬性関節炎

山口 由衣( やまぐち ゆきえ ) 横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 教授

乾癬患者の10-15%程度に関節炎が合併することは周知のこととなった。また、自然経過において、乾癬性関節炎患者は比較的高率に体軸炎を合併する。多くの症例で関節炎より皮膚が先行するため、皮膚科医は関節炎の存在に最初に気付くべき存在であり、その患者の10年後、20年後を考慮した診療を行う必要がある。どのような症例が関節炎の進行例となるのか、という視点に関しては今後も研究が必要な課題であるが、現時点で大切なのは、日常診療において注意深い観察と評価である。乾癬性関節炎患者の診療における薬剤選択は、時に難しい。患者背景、病態に基づくエビデンス、臨床試験データ、ガイドラインにおけるリコメンデーション、医師の経験値、などが薬剤選択における重要な影響因子と考えられるが単純ではない。本セミナーでは、早期乾癬性関節炎の診療という視点で、その特徴を概説、IL-17の重要性を整理し、経年的な具体的な診療の実例などを紹介する。未来志向の乾癬性関節炎診療を考えてみたい。

### 略歴

2000年	浜松医科大学 卒業	2013年	横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 講師
2001年	横浜市立大学附属病院 臨床研修医	2018年	横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 准教授
2003年	藤沢市民病院皮膚科	2021年 5月	横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 教授
2004年	横浜市立大学大学院医学研究科 博士課程		現在に至る
2005年	慶應義塾大学リサーチパーク・リウマチ内科		
2008年	Postdoctoral associate, University of Pittsburgh, USA		
2010年	横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 助教・病棟医長		
2011年	横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 医局長		

所属学会等 日本皮膚科学会( 取得専門医、指導医 )、日本リウマチ学会( 取得専門医、指導医 )、日本アレルギー学会( 取得専門医、指導医 )